

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 27 年 6 月 19 日現在

機関番号：23702

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2014

課題番号：23593163

研究課題名(和文) 学士課程卒業者の看護実践能力獲得過程と生涯学習支援プログラムの開発

研究課題名(英文) The Nursing Competency Acquisition Process of Graduate Nurses and Development of a Lifelong Learning Support Program

研究代表者

岩村 龍子 (Iwamura, Ryuko)

岐阜県立看護大学・看護学部・教授

研究者番号：00326109

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、学士課程卒業者の看護実践能力獲得過程を、卒後1～3年目の状況を経年的に捉える縦断調査と、4年目以降の修得・発展状況を捉える横断調査により明らかにした。

さらに就業施設の現任教育の現状を把握した上で、時期別の看護実践能力の発展状況や支援ニーズに適合する「現場の支援」「大学の支援」および「現場と大学が協働して行う支援」で構成する生涯学習支援プログラムを開発した。現場と大学協働の支援には、双方の情報・意見交換に基づく現状に合わせた支援(全時期)、大学の生涯学習支援を活用した実践改善の支援および大学院への入学勧奨をはじめとする各自が描くキャリアマネジメントの支援(卒後3年目以降)が含まれた。

研究成果の概要(英文)：The study elucidated the acquisition process of nursing competencies of graduate nurses using a year-by-year longitudinal research to understand their situations for 3 years after graduating, as well as cross-sectional research to follow the progress in competence acquisition and development from the 4th year.

A lifelong learning support program was developed, consisting of three types of support provisions, namely, 'workplace support', 'university support' and 'workplace-university collaborative support' suitable for each individual's developmental status of nursing competency and their needs. Suggested items among the workplace-university collaboration included timely support suitable for the reality based on information and opinion exchanges between the workplace and the university, and support for individual's career management, such as support by the university to improve nursing practices using the lifelong learning support program of the university.

研究分野：医歯薬学

キーワード：看護実践能力 看護学学士課程卒業生 生涯学習支援

## 1. 研究開始当初の背景

わが国では、学士課程教育において、「学士課程においてコアとなる看護実践能力と卒業時到達目標」(野嶋ら, 2011)を指標とした看護生涯学習の出発点となる基礎能力を育成し、卒業後に看護実践を積み重ね、各自の看護実践能力を発展させていくことができる体制づくりの推進が求められている。

しかし、看護実践現場では、平成 22 年度から施設毎の卒後臨床研修が努力義務化され、現任教育の充実が図られているものの、その内容等は個々の施設に任されているのが現状である。そのため看護系大学には、卒業後の看護実践能力の発展に向けた組織的な支援や、各大学が新任期の看護職者への支援を含めた生涯学習に積極的に取り組み、大学としての社会的役割と責任を担う必要があり(大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会, 2011)、これらを具現化する方法の検討が必要とされた。

先行研究では、新人看護職の看護実践能力の研究報告(本谷ら, 2010)や、そのなかでも学士課程卒業者に限定した新人看護職の看護実践能力の修得状況や発展過程を捉える研究報告(佐居ら, 2010)が散見されるようになった。しかし、学士課程卒業者の特質を踏まえた新任期の看護実践能力獲得過程や系統的な生涯学習支援という視点での研究報告は限られており(大室ら, 2006; 中山ら, 2010)、大学が学士課程卒業者の就業施設と協働して取り組む生涯学習支援について組織的・系統的に明らかにしようとする本研究の取り組みは喫緊の課題でもある。

また、本学では、開学以来、卒業者を含む県内看護職者との共同研究や個人で取り組む実践研究支援等の生涯学習支援や、卒業者同士の交流機会を設け支援してきているが、開学 10 年を経過し、卒業者の看護実践能力の獲得過程を捉えてより効果的な支援を施設側と協働して実施することが求められて

おり、そのことが県内看護職への生涯学習支援の充実を図ることにつながると考えられる。

## 2. 研究の目的

(1) 学士課程卒業者の看護実践能力獲得過程について、卒業時の到達目標を基点とし、卒業後 1~3 年目にかけて経年的に明らかにする。

(2) 卒業後、看護実践を重ねた学士課程卒業者が、自らの看護実践能力獲得過程を踏まえて卒業後 4 年目以降に創造的な課題解決能力についてどのように考え、どう取り組もうとしているか、また、学士課程教育や新任期教育がどう役立っているかを明らかにする。

(3) 学士課程卒業者が看護実践能力を獲得し、さらに自ら修得・発展させていく上で必要な支援方法を大学側および就業施設側から明らかにする。

(4) 以上の(1)~(3)の結果をもとに、大学が学士課程卒業者の就業施設と協働して取り組む生涯学習支援プログラムを開発する。

## 3. 研究の方法

看護職として就業した学士課程卒業者の看護実践能力の獲得過程を卒業後 1 年目から 3 年目にかけて経年的に追跡する縦断調査と卒業後 4 年目以降における創造的な課題解決能力を含む看護実践能力の修得・発展状況を質問紙で把握する横断調査、および学士課程卒業者の就業施設の現任教育の現状調査を実施し、その結果から学士課程卒業者が看護実践能力を獲得し、さらに自ら修得・発展させていく上で必要な支援方法を明らかにし、大学が学士課程卒業者の就業施設と協働して取り組む生涯学習支援プログラムを開発した。なお、本研究は岐阜県立看護大学研究倫理審査部会の承認を得て実施した(平成 23 年 11 月; 承認番号 0033、平成 26 年 2 月; 承認番号 0092)。

## 4. 研究成果

(1) 学士課程卒業者の看護実践能力の獲得

## 過程の明確化 その1：卒後1-3年目の看護実践能力獲得過程の状況

平成23年度および平成24年度本学卒業生で看護師・助産師として県内医療施設に就職した者のうち、平成23年度卒業生24名、平成24年度卒業生18名の計42名から、1年目前期に37名、1年目後期に15名、2年目前期に13名、2年目後期に4名、3年目前期に8名の回答を得た。

「学士課程においてコアとなる看護実践能力」の5群20能力別の状況は、群「ヒューマンケアの基本に関する実践能力」では、3) 援助的関係を形成する能力を中心に1年目前期から多く挙げられたが、1年目後期以降はより積極的に個別の関わりを持ちコミュニケーションを図っていた。群「根拠に基づいた看護を計画的に実践する能力」では、1年目は確実な手技の獲得に焦点がおかれ、1年目後期からの的確なアセスメントができるよう取り組み、2~3年目は個別の状況のケアの構築に向け努力していた。群「特定の健康課題に対応する実践能力」のうち約半数の記述件数を占めた4) 終末期にある人々を援助する能力については、1年目後期以降は、チームの一員としてだけでなく、受け持ち看護師として患者と家族の思いを傾聴し、望む最期を迎えられるよう家族を単位としたケアや調整ができるようになっていた。群「ケア環境とチーム体制整備に関する実践能力」は、全般に他の群より記述が少なかったが、その中で1年目前期に最も多かったのは16) 安全なケア環境を提供する能力であった。17) 保健医療福祉における協働と連携をする能力は2年目、3年目の記述が多く、その内容に実践の発展がみられた。群「専門職者として研鑽を続ける基本能力」では、1年目から院内・院外の研修会に積極的に参加し、2年目では勉強会の担当や資料作り、クリティカルパス作成などの日常業務での経験を通して学び、さらにその経験を振り返る

ことによって学んでいた。

これらの能力の発展に役立った教育には、新人研修や部署での取り組みといった現任教育や大学での実習・卒業研究で対象と関わった実践経験等が挙げられた。必要な現任教育には、看護技術や看護ケア方法、なかでも自部署で必要となる知識や技術に関する教育が挙げられ、大学教育には、基本的な看護技術・ケア方法、解剖や疾患、病態生理に関する教育のほか、多重課題への対応や優先順位の考え方に関する教育の充実が望まれた。

## (2) 学士課程卒業生の看護実践能力の獲得過程の明確化 その2：卒後4年目以降の看護実践能力の修得・発展状況

岐阜県内施設で就業している本学卒業生（卒後4~9年目）175名を対象に、平成24年10月、郵送による質問紙調査（無記名）を行い、80名（看護師41名、保健師21名、助産師6名、養護教諭3名、大学教員3名、勤務なし5名）の回答を得た（回収率45.7%）。

この1年間の看護実践における課題への取り組み状況を、「学士課程においてコアとなる看護実践能力と卒業時到達目標」を参考に看護実践能力の視点から分析した結果、該当データ数が最も多かったのは、看護師・助産師では、群「特定の健康課題に対応する実践能力」の13) 終末期にある人々を援助する能力と、群「ケア環境とチーム体制整備に関する実践能力」の14) 保健医療福祉における看護活動と看護ケアの質を改善する能力、次いで群「ケア環境とチーム体制整備に関する実践能力」の17) 保健医療福祉における協働と連携をする能力であった。

看護師・助産師の課題解決の取り組み状況は、所属部署など組織的な課題に対しては、3~4年目から病棟における委員としての取り組みが始まり、6~7年目以降はスタッフ育成や所属組織外との連携などが見られた。個別事例への援助では、終末期患者・家族への援助や在宅移行への支援などが挙げられた。

看護ケアの充実・改善に役立った現任教育として、所属施設等での経験時期にそった研修や特定分野の研修が挙げられ、さらに必要な教育として、実践に活かせる具体的な内容、知識・技術に関する研修が多く挙げられた。

役立った大学教育としては、グループワーク、マネジメントに関する学習、看護観や看護専門職として対象者にかかわる基本的な考え方の学び等が挙げられ、追加してほしい大学教育としては、それぞれの分野に必要な技術に関する学習等が挙げられた。

### (3)医療施設における現任教育体制の状況

平成23年度・24年度本学卒業者が看護師・助産師として就職した県内14医療施設の看護部および配属部署の教育担当者への半構成的面接調査の結果、全14施設(500床以上4施設・300床以上500床未満9施設・300床未満1施設)で、現任教育基本方針・目的を設定しており、【目指している人材の姿】【育む姿勢と能力】【育むための環境の提供】【組織としての責務】が明確に示され、学士課程で培った基本的能力を就業後に発展させることができる教育的方向性が基盤にあることが確認できた。これらの基本方針・目的を具現化するための教育体制として、13施設で看護部教育委員会等の組織化を図り、同じく13施設で独自の実践領域を定めてキャリア開発ラダーを導入し、集合教育・研修計画を策定し到達目標を明示していた。

新人は必須研修として勤務時間内の研修が保障され、部署での支援体制も明確となっていたが、卒後2年目以降は、集合研修参加やラダー申請を個人に委ねている施設が多く、部署での支援体制も曖昧になっていた。

外部研修については、看護協会主催の研修会や認定看護師等の育成機関への研修派遣を制度化するなど、経済的支援を実施するための予算確保を図る傾向が確認できた。

### (4)大学と就業施設が協働して行う生涯学習支援プログラムの開発

上記(1)(2)(3)により明らかになった本学卒業者の看護実践能力獲得状況や現任教育の状況をもとに学士課程卒業者が必要としている支援を明確化し、本学卒業者の就業施設であるA病院教育担当者7名との意見交換(平成26年11月~12月に計3回開催)を行い、ここで得た意見を加味して生涯学習支援プログラムを作成した。

学士課程卒業者は、卒後1~2年目には看護実践の自立・自律に向けて努力を続けながら、ケアのあり方を考えるなど長期的視野を有しており、現場での実際的な支援および心理的な支援を必要としていた。卒後3~5年目には、看護実践における自立・自律度が高くなるとともに新人の人材育成や組織の委員会等の役割を担うようになり、複雑な状態の対象者のケア、あるいはマネジメントやリーダーシップの役割等の新たな課題に直面することで、幅広い研修などで自己の能力を高めることを求めている。さらに、卒後6~9年目には、家族を含む幅広いケアの提供、自施設全体の看護ケアの質の向上に向けた取り組み、および自己のキャリアアップ計画をすすめることを求めている。大学院への進学や現場での研究活動の推進等に役立つ情報提供や支援を必要としていた。

以上のような学士課程卒業者の現状と支援ニーズに対し、現場と大学協働での支援としては、全時期にわたり現任教育についての情報・意見交換を行いながら、現状に合わせた支援を双方で実施していくこと、また、卒後3年目以降は、共同研究や研究支援等、大学の生涯学習支援に関する事業の活用を促し実践改善を支援すること、大学院入学や科目等履修を勧め各自が描くキャリアマネジメントを支援することが必要と考えられた。

学士課程卒業者の成長を支援する生涯学習支援プログラムは、それぞれの時期の成長の状況に適合する支援内容であるとともに、卒業者本人が自分で考え、自分で選択し、自

分で取り組むことのできるプログラムであること、また、適切な時期に看護実践を自ら振り返る機会を設けることが必要であると考えられた。

#### 5. 主な発表論文等 〔雑誌論文〕(計1件)

田辺満子, 丹菊友祐子, 岩村龍子, 大川眞智子, 松下光子: 岐阜県立看護大学卒業者が就業する県内医療施設の現任教育の現状と課題, 岐阜県立看護大学紀要, 15(1), 97-105, 2015.

#### 〔学会発表〕(計2件)

田辺満子, 岩村龍子, 大川眞智子, 松下光子, 会田敬志, 小澤和弘, 小西美智子: 学士課程卒業者が就業する医療施設の現任教育の現状と課題, 日本看護科学学会第34回学術集会講演集, 407, 2014.

松下光子, 岩村龍子, 大川眞智子, 田辺満子, 会田敬志, 小澤和弘, 小西美智子: 学士課程卒業者の卒業後4年目以降の看護実践能力の状況, 日本看護科学学会第34回学術集会講演集, 321, 2014.

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

岩村 龍子 (IWAMURA RYUKO)  
岐阜県立看護大学・看護学部・教授  
研究者番号: 00326109

##### (2) 研究分担者

会田 敬志 (AIDA TAKASHI)  
岐阜県立看護大学・看護学部・教授  
研究者番号: 50326104

田辺 満子 (TANABE MICHIKO)  
岐阜県立看護大学・看護学部・教授  
研究者番号: 60572873

大川 眞智子 (OHKAWA MACHIKO)  
岐阜県立看護大学・看護学部・准教授  
研究者番号: 10253923

小澤 和弘 (OZAWA KAZUHIRO)  
岐阜県立看護大学・看護学部・准教授

研究者番号: 20336639

松下 光子 (MATSUSHITA MITSUKO)  
岐阜県立看護大学・看護学部・教授

研究者番号: 60326113

黒江 ゆり子 (KUROE YURIKO)  
岐阜県立看護大学・看護学部・教授

研究者番号: 40295712

(平成26年度)

小西 美智子 (KONISHI MICHIKO)  
元岐阜県立看護大学・看護学部・教授

研究者番号: 20161961

(平成23~25年度)

##### (3) 研究協力者

丹菊 友祐子 (TANGIKU YUKO)  
元岐阜県立看護大学・看護学部・助教  
(平成24~25年度)

#### 文献

大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会.  
(2011). 大学における看護系人材養成の在り方に関する  
検討会最終報告.

本谷久美子, 藤村朗子, 関根いずみ, 他. (2010). 新人  
看護師の看護実践能力習得に関する縦断的調査 2年に  
わたる新人看護師の自己評価の分析より. 日本看護学会  
論文集: 看護管理, 40, 288-290.

野嶋佐由美, 中山洋子, 井上智子, 他. (2011). 看護系  
大学におけるモデル・コア・カリキュラム導入に関  
する調査研究報告書, 14-41.

大室律子, 佐藤まゆみ, 根本敬子, 他. (2006). 新人看  
護職者の看護実践能力を育成する教育プログラム開発  
大卒新人看護実践能力の到達度評価. 看護管理, 16(2),  
1055-1060.

中山洋子, 工藤真由美, 石原昌, 他. (2010). 平成18年  
度~21年度科学研究費補助金(基盤研究(A))研究代表  
者(中山洋子)看護実践能力の発達過程と評価方法に関  
する研究-臨床経験1年目から5年目までの看護系大  
学卒業看護師の実践能力に関する横断的調査報告書.

佐居由美, 松谷美和子, 平林優子, 他. (2010). A看護  
系大学卒業生19名の「看護実践能力」卒業直後と就  
職3ヵ月後の比較. 聖路加看護学会誌, 14(1), 34-42.